

---

# ハシバミの樹

神代翁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハシバミの樹

### 【コード】

N6817X

### 【作者名】

神代翁

### 【あらすじ】

幼馴染が虐待を受けている。

らしい、というのを僕は知っている。隣に住む彼女を時折、洗濯物を干すときなんかに見かけると、青黒い痣と真っ白な包帯に蝕まれた彼女を見るからだ。この光景から連想できる言葉は暴力だが、暴力と家庭環境の悪化と不備から連想できるものを僕は虐待しか知らない。

彼女が痛むのを見ながら、彼女がすり減るのを感じながら、最も付き合いの長い友人が壊れるのを我が身の事のように思いながら、努めて僕は気にせずいつもどりに過ごす。彼女のいない日常を、漫然とただ歩くように過ごす。

冷たい？ いやいや、皆様は随分と心優しい方々なのでですね。所詮は他人ですよ？ 心中察する事が出来ようとも、完全に理解しあうことの無い関係ですよ？ よくもまあ助けるなどという大義名分を掲げてズカズカと他人の、純白の羽毛を敷き詰めた、他人が入れば壊れてしまうような空間に立ち入れますね。

僕には無理です。

人に裏切られると、助けられた痛みより強く、痛みを感じてしまいます。涙の前に吐き気がでます。

僕には無理です。

僕には、僕が関わる事で発生する諸々に付き合う術を持ちません。無責任なのです。助けたら、それで終わりではないのに。

僕には無理なのです。

例え、彼女が僕の支えだったとしても。

電撃小説大賞二次落ち。

リベンジ予定なので、メッタメッタに叩いて潰して摩り下ろしてくれば幸いです。

これから受ける方の指針になったりできれば、これ以上の喜びは御座いません。

## プロローグ

その行為が始まったのはパパが死んでからだった。

「  
」  
無言のままに、髪を肩口で切りそろえた女が私を殴打する。右の拳で肩口を、左の拳で鳩尾をそれぞれ殴る。殴られる度に私の呼吸は乱れ、鳩尾に拳がヒットして私は床に崩れ落ちた。

私、何で殴られてるんだっけ？

その疑問の答をきくと、私は知ってる。

ただ、理解が出来ないだけだ。私とこの女コトの思考回路は違いすぎて、この女にとっての当然は、私にとっての当然では絶対でない。

蹲っている私を蹴り飛ばし、背中を踏み砕くように踵を落とす。気が付けば口の中に血の味が広がっていた。口腔を満たしていく鉄の味を噛み締めながら、亀のように体を丸めて女の攻撃から身を守り続ける。

こんなのは突発的な嵐みたいなもの。

いずれ通り過ぎていく。

その筈だった。

「えっ………？」

最初に感じたのは違和感。左腕の側面一杯に鋭い何かが通り過ぎる感覚。

次に感じたのは熱。

真っ直ぐな線が熱を持ち、次の瞬間痛みになる。

「嘘………」

キラレタ、目の前の女に、包丁で腕を切られた。

「嘘」

もう一度呟いて、無事な方の右手で左腕をなぞる。べっとり血が手に付いて泡肌立つ。血は鼓動とは関係の無いリズムで流れ出す。それはつまり、静脈を斬られたということ、どす黒い血が私の体

を汚してく。

目の前の女が微かに微笑み、包丁をその辺に捨ててまた私を殴りだした。

拳に対してなのか、それとも腕の痛みに対してなのかはわからなかったけど、私は「痛い」と叫び続けていた。拳打を私に打ち込み続けていた女はやがて満足し、部屋から出て行った。

私の体には鈍痛が残っていたけど、それらを無視して腕の状況を確認する。肘から手首まで、真っ直ぐに切れていた。最初は気が動転して大きな怪我に感じたけど、今見るとそうでもない。肉の層まで刃は届いていたが、手で押さえれば止血は出来る。死にはしない程度の怪我だ。

私は立ち上がり、部屋の隅に置かれている机の上から包帯を取り、腕をきつく圧迫しながらそれを巻いた。いざという時の為に学んでおいた止血法が役に立った。

血が止まったことでピンと張っていた緊張の糸が緩み、私の意識は遠退いていった。

目を覚ましたら部屋は真っ暗だった。壁に掛かっている割れた時計を見ると、時刻は午前二時らしい。

「こんな生活してたら、いつか死んじゃうよね？」

私以外に誰もいない部屋で、私以外の誰かに問う。そして問いの内容に背筋が震えて、リアルな恐怖で頭が埋め尽くされ歯が鳴りだす。

嫌だ！

私は

死にたく

ない！

嫌だ嫌だ！

私は

死にたく

ない死にたくない！

死にたくない！

私は

幸せに生

きていたい！

どうすればこの状況から抜け出せるかを真剣に考える。

学校には暫く行かせてもらってない。友達もあんまりいない。一度

捕まりかけた事があるから、警察には頼れない。児童相談所は動き出すのに時間が掛かり過ぎる。

私は今、この時、真後ろにいる死の恐怖から逃れたいのに！

私は今、義母と、仮にも母と呼ぶ女性から逃げ出したいのに！  
だけど、私は逃げてはならない。

逃げてはならないから、より一層辛いのだ。

今ここで逃げてしまったら、確実にパパとママの思い出は捨てられる。私のアイデンティティを構成しているものを、命と同価値の思い出は守らなければならない。

どうやって？ 分からない。だけど、守らなければならない。

その時、視界の端に写真が映った。それは、パパが生きていてママがまだいた頃の写真。その写真にはパパとママと私の他に男の子が一人映っていた。屈託ない笑顔を浮かべて男の子はピースサインをしている。小学校何年生の時の写真だろうか。

これだ、と思った。

彼しかない、と感じた。

私は椅子から立ち上がり、あの女が私を痛めつける為に使うバッドを手に取りベランダに出た。そしてベランダの淵から乗り出して、バッドを力なく振った。一度目で窓ガラスに罅が入り、重力に引かれる様な二撃目でそれが蜘蛛の巣のように広がり、残りわずかな力を全て込めた三回目で窓ガラスの中央に十センチほどの穴が開いた。部屋の中に戻り私は手紙を書いた。携帯や電話が使えればいいけど、生憎と私は携帯を取り上げられており、電話は今掛けても彼は出てくれないだろう。彼の家の郵便ポストは彼の叔父からの手紙で一杯だから、彼は開く気にもなってくれないだろう。

乱暴だけど、私に興味を持ってもらうにはコレしかない。

縋り付く様な想いで手紙を書き、丸めてガムテープでぐるぐる巻きにし、それを隣の家に投げ込んだ。

## プロローグ（後書き）

前にもこの小説を投稿していたのですが、三分割で出してしまい大変読みにくかった。という意見を頂いたので、その教訓を踏まえて小分けにして投稿したいと思います。読みかけだった方、申し訳ありません。朝と夕に投稿していこうと思いますので、苛立ちを沈めてお付き合い下さい。

## 一枚目！

1  
生きてる理由を考えた事があるかい。  
僕は、いつもそればかりを考えていた。

朝起きたら部屋の窓ガラスが割れていた。

窓ガラスは内側に向かって割れており、それはつまり外から割られた事を意味する。僕の部屋は二階で隣の家との距離は一メートルもない。

「……何で？」

何で、どうしてガラス割れてるの？

状況的に考えて、犯人はお隣さんだろうか。それとも、別の誰かか、何かか。

とりあえず散乱するガラス片を片付け、学校に行く準備をし、業者に連絡をしておく。放課後に窓を直す事に決め僕は家を出た。

公立の僕が通う学校は徒歩二十分ほどの所にある。

教室に着いた僕は窓ガラス割りの犯人と思われるお隣さん。つまりは、幼馴染の姿を探した。

そのうち授業開始のチャイムが鳴り、先生が入ってきた。それでも、真っ黒に染めた前髪で自分の顔を隠しきった幼馴染は現れなかった。今日も休みらしい。

普段と変わらない、変わり映えのしない学校生活が始まる。

賑やかな教室の中で僕だけが異質で、僕の周りだけが円状に静かで、クラスの異端である僕は黙って黒板を見つめ続ける。授業中に先生が飛ばしたギャグを聞き流し、静かに静かに、何かから隠れるように、出来る限り僕がここにいた痕跡を残さないように、隠忍自重で勉強をする。

僕が気配を消しているのも、姫宮という名字のお隣さんが学校にきていないのも、入学式より数えてひと月の今では当たり前前の事になっていた。

やがて午前中の授業が終わった。

昼飯を食べてから薬を飲む。薬を飲む行為が習慣化して以来、水を使わずに何錠でも飲むようになっていた。

「黒澤、ちよつとこつち来い」

放課後、担任の先生に呼ばれた。何だろう、と訝しげに首を傾げながら教卓の横に着くと……。

「姫宮は体調悪いのか？ かれこれひと月学校来てないけど」

「わからないです」

姫宮灰香。それは僕の幼馴染で家の窓を割った、現段階での犯人候補の一人。

素直に返した僕の返事に、先生が不服そうに言葉を足してくる。

「お隣さんなんだから。もうちよつと何かないか？」

「……ないです」

少し考えてからそう返すと先生は、そっか、と頷いて僕にプリントを渡してきた。今日の分のプリントらしい。入学式以降、学校に来なくなつた彼女にプリントを届けるのが僕の役目になっていた。手入れをしていないボサボサの髪を掻き揚げながら先生が言う。

「それと、お前も顔色が悪い。ちゃんと栄養つくもん食えよ」

「わかりました」

ペコリとお辞儀をして教室を出る。

姫宮は中学校二年の時も不登校だった。とある事件を起こし不登校になった。それが中学二年生の時の姫宮。

中学校二年生までの彼女は綺麗な子だった。

儂げで、清楚で、脆く傷つき易い。

ただど彼女は裏返った。性格がとある事件で、裏返って、逆さになつて、豹変した。

変貌を遂げた証拠に髪を黒く染めて。

変容を遂げた証明に顔を髪で隠して。  
変質を遂げた自我を心の内に秘めて。  
だけど、今回は違かった。

姫宮の父親が入学式の最中に倒れて、痙攣が止まった姫宮の父親に養護教諭が心臓マツサージをしていたのをよく覚えている。心臓マツサージを続ける養護教諭の額には汗が浮かび、父母達が半端に腰を浮かせて見守る中、姫宮の父親は死んだ。

その一瞬前まで確かにあった生气というものが消え去るのを僕は見た。苦しみで固定された顔、中から何かが飛び出しそうな程見開かれた瞳からふつと、風に連れて行かれたように生气が消えて、目玉はガラス玉の輝きに落ちた。

誰かが叫んだ。

それは、姫宮の父親の隣に座っていた女性だった。女性　姫宮の義母は、他の誰が叫ぶよりも速く叫んだ。倒れて動かない姫宮の父親にすがりついて、何度も何度も名前を呼ぶ。皆がまだ命が無くなつた瞬間に茫然自失としている中で、一人だけがひび割れた声で泣いていた。彼女の膝の上に座っていた少女がとことこ姫宮の義母の所まで歩いていき、彼女はその少女を外敵から守るように抱き締めた。

その時、姫宮が人垣を割って父親の死体に近づいてきた所だった。父親の死体を一瞥し、何事か口の中で呟いた姫宮は、ふらふらと歩いていた少女に手を伸ばした。彼女の義妹に手を伸ばした。

姫宮の義母にとっての外敵とは、姫宮だったらしい。

なおも手を伸ばした姫宮に義母は一言「触れるな」と囁いた。間に何人いようと届くほど、憎しみの炎を込めた言葉。遠くで聞いていた僕にさえ鳥肌が立ち怖気を感じた。

やがて姫宮の義母は女性教諭に連れられて体育館から出て行った。ただ一人、姫宮を残して。

それから彼女は学校に来ていない。

そんな事を考えているうちに、姫宮の家の前に着いた。

姫宮の家は僕の家と同型の一軒家。赤っぽい色を基調としており、土地の関係で細長い形となっている。家には小さい庭があり、そこには物干し竿がでんと一つ置いてあった。彼女の家は今、女性しかないなので防犯の為に下には洗濯物を干さないのだ。

家の二階、洗濯物が干してあるベランダを眺める。空中にせり出したあの場所からなら、僕の部屋の窓までは一メートルもないだろう。そんな事を考えながらインターフォンを押し、僕が来た事を伝える。いつもなら返事は無い。

『……ねエ、窓ガラス割れてたでしょ』

だけど今日は違った。珍しく姫宮がインターフォン越しに僕に話しかけた。

「姫宮さんがやったの、アレ？」

『違うよ。天使がやったの』

「そっか。天使か」

一月ぶりの会話も意味が通じなかった。意志の疎通が出来ない会話に意味はあるのだろうか。今の僕には、あってもなくても意味は変わらないけど。

『ところで、いつからだっけ。私の事、名字で呼ぶようになったの』  
久しぶりに聞いた彼女の声は、少しだけ震えているように感じた。

何かを我慢しているような、何かを期待しているような、そんな微細な震え。その震えに気付きながらも、平淡に僕は言葉を返す。

「……二年前かな」

『早いねエ、あつという間だった』

特徴のある語尾の伸ばし方が気になる。自然な伸ばし方ではなく、何かを意図した、無理やりな感じのある余韻。

中学二年生の時だった。「灰香」と名前を呼んだ同級生の首を姫宮が絞めた。

笑いながら名前を呼んだ子を、泣き笑いの顔で首を絞めた。

壊れて破綻した歪な笑みだった。笑いたくないこと、信じたくないことを、認めてしまつて、笑うしかなくなつてしまつたような、そ

んな笑み。

首を絞められた子はそれから二週間は首に痣がついていて、痛々しかったのをよく覚えている。

その事件以来、彼女のことを下の名前で呼んだ者はいない。

狂ってるんじゃないの、アイツ。

誰かの声が頭の中に再生され、胸がざわついて生唾を飲み下す。

『それじゃア、またね』

一方的に通話が切れた。僕はいつも通り、プリントをポストに押し込むと隣の自分の家に帰った。ポストは、僕が今まで届けたプリント類や新聞等で埋まっていた。

何で僕は彼女にプリントを届けているんだろう。わざわざ届ける必要なんて、ない筈なのに。

その疑問に対する答えは見つからず、僕はポケットから錠剤ケースを取り出し、不安を消そうとするように錠剤を飲み込んだ。

今日は疲れた。

靴を脱ぎ散らかし、階段を登って、制服のままベッドに潜り込んだ。

「制服、しわになっちゃうな」

自嘲気味にそう呟いて、睡眠薬をいつもより二錠多く飲み込んだ。

## 一枚目！

2

次の日。

今度は隣の部屋の窓ガラスが割られていた。

割られているのに気付いたのは風呂上り、洗濯物を干しに来た時だった。我が家のベランダは妹の部屋を通らないと出られない造りになっている。

音で起きないのは僕が睡眠薬を飲んで眠っているからだけど、割れた窓ガラスを見た時僕は思わず頭を抱えた。このまま窓ガラスが割られ続ければ最悪バイトを増やすしかない。勉強の時間は確保したいけど、それすらも仕方無い。

放課後。

僕は薬の残りがなくなっている事に気づき、帰り道を急遽、行き着けの病院へと変えた。

白代総合病院という古びた飾り文字を見上げながら病院に入る。外科から内科、泌尿器科から精神科まであるこの病院は正に総合病院だ。

僕はいつも通りエレベーターで四階に上がる。

「そろそろ来ると思っていたよ、黒澤明君」

部屋に入ると柔和な笑顔を湛えた中年医師がいた。胸の所に止められたネームプレートには「精神科医 新城 真」と書かれていた。

「すみません。いつもの薬をお願いします」

医師は頷くと傍らにいた看護師さんに薬を処方するよう言いつけた。医師が僕に背を向けてカルテを書き出す。僕はいつも通り、古びたソファアに座ってソレを待つ。

今時珍しい古ぼけた置時計がカチコチと時を刻んでいく。

「そういえば、君がココに来るようになって何年経ったかな？」

ふと思い付いたという調子で新城医師が僕に尋ねた。

「四年目です」

「まだ、忘れられないかい？」

その質問に僕は何も返さなかった。この質問は此処に来る度繰り返される問答だし、答えのないのも問答のうちだ。

やがて新城先生がカルテを書き終わり、看護師から受け取った薬を僕に手渡してきた。薄緑色の精神高揚剤と白い睡眠薬、それから蒼い精神安定剤の三種類だ。割合は睡眠薬が一番多く、精神安定剤が一番少ない。

「あまり常用的に使うのはよくないんだけどね。睡眠薬も抗鬱剤も麻薬の親戚みたいなもんだからさ。はまっちゃう人もいるんだよ」  
抗鬱剤と薬の事を言われるのは嫌いだ。皮肉を込めて、「僕ももう薬が必要ないですか？」と訊ねた。

「どうだろうね。薬効成分で君の脳内物質の働きを活性、あるいは減退させる事によって感情はある程度コントロールでき、大半の人はソレで脳が正常化して必要なくなるんだけど、君の場合はどうだろう。薬よりも、人間関係において何かしらの進展があった方が薬より効くのではないかと私は思っている。原因がそこにあるんだからね」

この人は正直だ。

だから 苦手だ。

僕は手短にお礼の言葉を述べ、病棟四階の精神科室を後にした。

どうやら僕は、正常ではないらしい。

こんな日でも姫宮へのプリントは届けなければならぬ。いつものようにインターフォンを押して待つと、昨日に引き続き珍しく今日も返答があった。

『窓ガラスが割れてたでしょ』

「……割れてたよ」

昨日と同じく震えた声。その声に僕は、きみがやったの？ そう問

いかける事はしなかった。彼女が僕に尋ねた時点でそれは確定に等しいからだ。

『アレはね、悪魔がやったの』

彼女の、鈴が鳴るように軽やかな声を聞いた瞬間だった。

「……ふ　ざけるなよッ！」

怒りが火のように弾けて、インターフォンに向かって叫びつける。

「お前はお遊びかもしれないけどな、僕は生活が掛かってるんだよ

！　お前の遊びに、僕をつきあわせるなよッ」

肩で荒い息をつく。

僕の病気は「外傷後ストレス障害」というものだ。自分が死にかけたり近い人が同様の状態になることで発症する事がある精神病。

自分の心が、自分でコントロール出来ない。同じ病気でも僕はマイナスに位置する為、何かしらがあった時、僕の心は暗く沈む。だから、こうして声を荒げる事は珍しいと、自分の中の冷静な部分が考えていた。

『　なさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……』

気付くと、彼女は引き攣った声で僕に謝り続けていた。ポケットに入っている錠剤ケースから、緑色の精神安定剤を一錠取り出して飲み込む。この薬にそこまでの即効性はないのだが、精神的に幾分か楽になる。

「別にいいよ」額の汗を拭う。「本当は、よくないけど」と言うてから、ポケットに錠剤ケースを戻す。

『天使の贈り物は届いた？』

懺悔の余韻を秘めて揺れた声。その声でもって、謝罪の気持ちはありながらも、あえてそれらを無視してまで僕に何かを伝えようとしているようだった。

「……ハア？」

意図が分からず、不快感を込めて聞き返す。

『悪魔の贈り物は届いた？』

ガチャ。と音を残してインターフォンが切れた。

何なんだよ、一体。突然謝ったり、意味のわからない事を言ったりして。

何をどうしたらいいのかわからなくなった僕は、思いつきり頭を引っ掻き回した。ブチブチと髪の毛が抜けたり千切れたりしてとても痛い。

だけど、その痛みで心が安らぐ。

それからはどうしたか覚えていないが、気付いたら僕は自室で寝ていた。

うたた寝から目を覚まし、腕時計の時刻表示を確認すると午後八時三七分だった。夕方の姫宮の言葉が気になり僕は立ち上がった。

天使と悪魔の贈り物。

僕の部屋をうろつくと歩きベッドの下を覗き込んでみると、丸い形に丸められた紙とガムテープに包まれた何かがあった。それを拾い、回してみると「Angel」と油性ペンで紙の部分に書いてあった。気になった僕は隣の部屋も探してみる事にした。

勉強机と洋服筆筒とベッド、それから幾ばかの物だけがある部屋に足を踏み入れる。

部屋に入り、物が入り込みそうな場所を探していると、辺りにタンパク質が燃えたような臭いと、ゴムを焼いた様な異臭が立ち込め、それと同時に吐き気が込み上げてきた。どうにかそれを我慢しながら探していると、勉強机の後ろから何かをガムテープで丸く固めた物が出てきた。書いてある文字は「Daemon」悪魔の古いつづり。

天使と悪魔の贈り物、そんな物の為に僕の家之窗ガラスは二度も割られたのかと思うと無性に腹が立って、その二つの物体を僕はそこらへんに投げ捨てて自室に戻った。着替えてある所を見ると、風呂には入ったのだろう。

睡眠薬を三錠飲んで嘘の眠りにつく

息苦しいほど湯気が立ち込め、自分の腕さえも見えない浴室。

私は暫く前から湯船に浸かっていた。

明への手紙を投げ込んでから暫くして、あの女が私に「風呂に入рина、臭いから」と告げた。

二週間ぶりのお風呂に心は躍り、意気揚々と私は浴室へと向かった。半透明のガラス戸の向こうで人影が時折チラつく。あの女が私を見張っているのだ。

「湯船から出たら殺すよ」

事も無げに告げられた言葉で、お風呂は拷問へと姿を変えた。日曜日以外では珍しい休日を、私を虐める為に使うあの女。

視界がグラつく。

吐き気が込み上げる。

手先は水分を失いしわしわでお婆さんのよう。

あの女の影が消えると同時に私は蛇口から冷たい水を飲む。その冷たさで頭がガンガンと鳴り目眩が加速する。

蛇口の水を止めると同時に女が更衣室に現れ、浴室と更衣室をわけるガラス戸に鍵を掛けた。

何？ 何をする気？

ゴボンと音がした。

「熱ッ」

あの女は追い炊きをしていったらしい。慌てて追い炊きを止めるが、温水の吐き出し口に接していた左太腿を火傷した。浴槽から出て冷たい水で太腿を冷やしていると誰かが外に出ていく音が聴こえた。

十歳の義妹は絶対に外に出られないからあの女に違いない。

逃げよう。

この状況下で、それは当然の帰結だったかもしれない。だけど、かなりの勇気が必要とするものだった。

この家から逃げよう。

思い出に囚われて死ぬなんて、本末転倒もいいところじゃない！  
そう意志を固めた私は立ち上がり、ガラス戸に体当たりをした。ふ

らつく足でした体当たりは威力なんて無いに等しかったけど、十分間も繰り返し続けているとガラス戸が外れて私は外に転がり出した。冷たい外気が肌を舐めていく。その心地よさに一度目を瞑ってから起き上がる。その足で二階に上がり、服を適当に見繕い、どこかオカシイところは無いかと割れた手鏡でチェックする。

「髪の色、落ちちゃった……」

母譲りの白っぽい金髪の下に疲れた目の私がいる。最後に染めたのは一月以上前で、長時間湯船に浸かっていたから仕方無い、そう割り切った。

時刻は正午をとくに過ぎていて、朝から何も食べていない私の胃が鳴る。

あの女の部屋を漁って幾らかのお金を得た後、私はひと月ぶりになる屋外に飛び出した。

色 音 光。芳香。人 音、人 電子音 人々 臭い

有象無象。

男……女……男男女女。若い……と……老い。多種多様 孤影悄然  
和気藹々。

夜の繁華街は様々な人と物に溢れかえっていた。久しぶりに見る外に私の胸はときめき、それと同時にどうしようもなく悲しくなった。本当なら、私もあの中にいただろうか。

仲睦まじく歩くカップル。狂喜乱舞する男女。

どこで、間違っただろうか。

「アレ？ アレレレ？ ほの 姫宮さんじゃあん！」

物思いに更ける私に誰かが声を掛けた。

「超っ懐かしいじゃん！ え、なになに？ 元気してた？ っつーか髪の色元に戻したの？ やっぱそっちの方が似合ってるよ。つかマジ可愛いつす！」

馴れ馴れしく声を掛けてくる顔面ピアスだらけの男。

「……若本、君？」

「え、マジで？ 覚えててくれたの！ 超っ嬉しいわー」  
忘れられる筈がないでしょ、その一言を飲み込むのにどれだけ苦労したか。

若本剛志は以前私に告白した男子だ。断った私を力づくで組み敷いた男子でもある。その時は先生が通りかかって助かったけど、忘れられる筈もない顔だった。

若本はニヤニヤと汚く笑いながら私の肩に手を回してきた。反射的にそれを払うと「あ？」と不機嫌そうに鼻を鳴らし私を睨みつける。「あの、触らないで」

それだけを搾り出すと、

「悪い悪い」

へらへらと笑いながら今度は腰に手を回してきた。私を逃がさないように腰のベルトを掴んでいる。そして、そのままグイッと横道に引っ張られた。引きずり込まれた路地の先を見れば、青いライトで照らされたホテル。

ツツツ！

もしかしたら違つかも、なんて考えなかった。

私が驚いている隙に若本は私の首元に舌を這わせていたからだ。

「嫌ッ！」

体を滅茶苦茶に揺らす 若本の手は外れない。それどころかより強く私を抱き締める。

若本の顔に爪を立てる 私の腹に一発、膝蹴りが入る。

呻く私を若本はホテルへと引きずっていく。

「助けて」

夜の喧騒に紛れて声は消えていく。絶望に頭が塗り固まった瞬間、若本が生ごみに足を取られて滑った。

「うわっ、た」

若本が壁に手をつきベルト掴む力が弱くなる。私はその隙を流さず全力で路地の外へと飛び出した。壁のように連なる人々の群れに無理やり入り込み、どこを目指しているかも分からないほど全力で走

る。  
後ろから聞こえてきた若本の怒声は、私の走る速度をさらに上げた。

二枚目！（後書き）

今更ながらに、消えてしまった閲覧回数が恋しい……。

### 三枚目！

3

次の日。

またしても僕の部屋の窓ガラスが割られていた。業者にきてもらって僅か二日。真新しい輝きのガラス片が、フローリングの床に散らばっている。

それを確認した僕は思わず膝をついた。

僕の完敗だ、もう許してくれ。そう悪態を吐きたくもなかったが、吐く相手がいないので掃除を始める。すると、壁の近く、わりと目立つ位置に「Demon」と書かれた丸い物体が落ちていた。悪魔が二個目。まさに、僕にとつては正に悪魔だった。

僕はひと月に十数回、不定期のバイトをしていたが、窓ガラスが連続で割れて威風堂々としていられるほどの貯えはない。こうなってしまうた今、バイトを増やさざるを得ない。

いつもより多めに精神高揚剤を飲み下してから学校に行く。

まいったな。

昨日は怒れたのに、今日は怒りが微塵も湧いてこない。ただ空しいだけだ。

昼休み。

屋上に出てから僕は電話を掛けた。屋上は僕の他に誰もいなく、落下防止柵がぐるりと屋上を囲み、給水塔が影を落としている以外には何もなかった。僕は給水塔の影に座り込む。

電話の相手は中学校時代の数少ない友達。『僕』に『人』と書いてユートと読ませる一風変わった名前の持ち主。

『ああ、はい、ユートです』

三枚目、酷く眠そうな声で電話の相手が電話に出た。

「ユート、僕。電話の音遠いけど大丈夫？」

ちょっと待て、とユートが言った。目を覚ます為に目薬でもさしているのだろう。中学校以前からの彼の癖だ。

『マイク壊れてるだけだから気にすんな。それで何だ。バイトでも紹介して欲しいのか?』

さっぱりとした声でユートが電話越しに話す。眠気は完全になくなつたらしい。

「そう」

ふむ。とユートは一瞬考え『螺子工場で螺子を見つめ続ける仕事があるな。時給は九百円。そこから紹介料で千円もらうけどな』

「時間帯は?」

電話の向こうでトントンと携帯を叩く音が聴こえる。規則的に鳴らされるその音は、僕の心音とピッタリと同じで、不思議な安息感を僕に与えた。

『螺子工場は午後三時から午前二時まで』

「お願い」

『あい、わかった。変わり者だな、お前。社会をドロップアウトした俺に電話して仕事貰うなんてよ』

ブツリと電話が切れる。階下からは音楽放送の音が、幾多の声と共に響いてくる。

どうしてだか僕は階下に行けず、給水塔の影から青い空を眺め続けた。

放課後。

螺子工場に急いで行こうとしていた僕は担任教師に呼び止められた。用件はどうせ姫宮のプリントの事だろうけど。そう当たりをつけて担任教師の前に立つ。

「姫宮が失踪したらしい。一応プリントは届けておいてくれ」

予想の斜め上に行くお答えだった。担任の先生 名前はそういえば知らない は無機質な文面ながら焦りを滲ませた声でそう言った。「はあ、わかりました」と気の抜けた返事を返した僕は、つい

でとばかりに聞いてみた。

「先生、名前なんてしたっけ？」

「……酒井紗希だよ。君に名前を聞かれたのは、コレで今月二回目なんだが、そろそろ嫌がらせだと思っただけいいか？」

顎のラインは細く鼻や唇の形も悪くない。目つきが気だるげなのが玉に傷だが、それを差し引いても美人と目をつけていい領域だろう。ただ、まったく見た目を気にせず、それどころか美容から最も遠い場所に自分を置き続けた為か、鼻眉目に見えても今の姿は美人には見えなかった。完全に宝の持ち腐れである。実に勿体ない。

「駄目です」

足早に教室を出る。現在時刻は二時三十分を回った所。目的の螺子工場は学校から丁度二十分ほどの位置だから、大体時間通りだ。

校舎の外に出ると、校門の辺りで髪を茶に染めた若者が、在校生の黒髪少女を相手にナンパをしていた。それを見て他の生徒がヒソヒソと何事が言い合い、中には教員を呼ぼうか、といった話まで聞こえる。

「だからさ、十分。いや、五分でいいからお茶しようよ」

「いや、あのう、私彼氏いるんで……」

若者は身振り手振りを加えて女生徒を口説いていくが芳しくないらしい。やがて女生徒が若者を振り切るようにしてその場から逃げだした。それを確認した生徒は一樣にホッとした空気を出した。

だが、若者はそれが気に入らなかつたらしい。校門を通ろうとする生徒の一人を捕まえて何事が話す。すると捕まえられた生徒は顔を青くして首を横に振っている。それを見た後、若者は口角を吊り上げてさらに何事が呟いてから生徒を離れた。離された生徒が逃げ出すのを尻目にしながら、校内に残る生徒一人一人に因縁をつけるように視線を這わせる。

と。

その視線が僕の視線とぶつかり、数秒間僕を見つめた後、視線の主が軽く手を挙げた。

すると

「いよお、お久」

軽い感じで僕に向かって手を振ってきた。手が振られるのにあわせて、両耳の髑髏形のピアスが太陽光を反射してキラリと光り、あわせて腰のチェーンも揺れた。

ユートだった。茶に染めた髪に、黒地を所々白く抜いたシャツ、色あせたジーンパン、鋭い目の光。完全にユートだった。見間違いだと願ったが、完璧にユートだった。

彼は僕に軽く挨拶をした後、校門の外側に止めてあった自前のバイクに跨った。ちなみにバイクも黒である。

辺りの生徒は僕の地味な外見とユートとのギャップに驚き目を白黒させていた。

何も言わずに僕がユートの後ろに腰を下ろす。僕とユートとの間に鞆を入れ、ユートの腰に手を回す。

「んじゃま、行きますか」

染め抜いた髪をヘルメットに押し込んだユートがバイクにキーを入れる。背後の生徒達のざわめきが大きくなる数瞬間に、バイクのエンジンがうなりを上げ間髪入れずに発進した。

螺子工場までは二十分で着く。ただし、バイクで。

僕らのバイト先の螺子工場は、建築から二十年ほどが経っている老工場だ。元は白く塗られた外壁も色落ちし灰色がかって見え、古色蒼然といった風体だ。ユートはバイクを工場の敷地内に止めているところで、僕はそれをただ黙って見ていた。

螺子工場でのバイトは初めてではなかった為、連絡事項や注意事項なども特になく仕事が始まる。

流れてくる螺子を、一つ一つ見て、形が悪く使えないようなら省く。この作業を七時間、休みは一度だけの三十分。ユートはかなり辛い、と言っていたが僕はさほど辛くもなかった。強いて言えば、椅子がないのが寂しいくらいで。

静かな、ベルトコンベアーの流れる音しか聞こえない静かな仕事場に、唐突にユートの話し声が聞こえた。

「幽霊を見た奴がいるってよ」

錆びた鉄骨に囲まれた敷地内。ベルトコンベアーを流れてくる螺子を見つめながらユートがそう言った。

「へえ、どんな？」

とユートの方を見もせず訊く。恐らく彼も、こちらを見てはいないだろう。

「姫宮の」螺子を選別していた僕の手がピクリと止まる。「幽霊だつてよ」ユートが話を続ける。

「昨日の夜遅くに、繁華街で見た奴がいるって噂だ」

「……何で姫宮だとわかったの？ というか、何でそれがユートの所に広まるほどの影響力を持った噂なの？」

「中学一緒だった奴が見たから。それで二つの答えにはなるだろ。髪の色、元に戻してたらしいぜ」

ユートが螺子を一つ選び取ってベルトコンベアーから出した。

姫宮の髪は英国人のお母さんの影響で白に近い金の髪だった。染めたのではなく、自然に輝く髪だったから繁華街の光の中でも目立った事だろう。

「それで、ソイツの友達<sup>タチ</sup>が姫宮に声かけたら……中学二年生の時の繰り返しになったと」

「首絞めたの？」

「いや、人差し指を折られたらしい。相も変わらずおっかねえな。

親父さんの再婚相手から虐待受けてるって噂もあったけどよ、そんな噂がどうでもよくなるくらい、アイツ自身が目立つよな」

かかつ、とユートが軽く笑う。拍子木のように乾いた声。彼の笑い声は小学校の頃から力行のどれかに限定されている。

「虐待受けてるのは多分本当だよ」

僕の前に流れてきた不恰な螺子を外に出しながら、

「たまに窓から見た時とか、腕に包帯巻いてあったり、服もボロボ

口だったり、廊下がゴミで埋まっていたりしてたから」とユートに話した。

「……マジ？」

軽い笑い話ですませる筈だった話に信憑性が出たことにユートは驚き、反応が一瞬遅れる。ユートの声は笑っていた時よりも幾ばか真面目で、それは自分が踏む必要のない地雷をうっかり踏んでしまったことに対して後悔しているようだった。

彼は、見た目に反して情に厚く涙もろい。ユートが不良のように振る舞うのはタダの強がりだと僕は思っている。なぜなら、彼は今日校門でナンパをしている時も、他の生徒に絡んだ時も、無理して笑っていたからだ。

それは大多数の人は気付かないであろう嘘の気配。

だけど、かつて嘘に手痛くしてやられた僕には嗅ぎ取れる臭い。

いつかは彼に、彼の事を詳しく聞いてみたい。小学校からの付き合いながら、僕はユートの事をほとんど知らないのだ。家族構成も住所も知らない。その事に一抹の寂しさを感じながらも、あえてそれを意識しないようにユートの話題に乗る。

「マジ。普段はカーテン閉まってるんだけど、日曜日だけは義母がいて、掃除の為に窓が開いてるんだよ」

端的な説明を終えると同時に、作業終了を示すブザーが工場内に鳴り響いた。

「そういえば、何で幽霊なの？ 姫宮死んでないでしょ」

「忘れたのか、アイツのあだ名。幽霊だったろ」

そういえば、そうだった気もする。髪で顔を隠した姿が四谷怪談の亡霊のイメージにぴったりだったから、そんな理由でつけられたあだ名だったと思う。

作業着から普段着に着替え、今度はポスティングのバイトの為に外に出た。

螺子工場から出た後、僕とユートは繁華街近くのファミレスに入り遅い夕食を食べていた。

ちなみにこのファミレスは近所ではちょっと有名な所だった。数多あるファミレスの中で生き残ろうとこの店は試行錯誤を繰り返して、独自の進化を遂げていた。それも絶滅の可能性が非常に高い方向へと。意図がわからない謎メニューが多すぎるのだ。『新メニュー、イタリアリゾット風チャーハン』とはなんだろうか。リゾットなのだろうか、チャーハンなのだろうか。そしてイタリアなのだろうか、中華なのだろうか。明らかかな失敗臭を漂わせるメニューをなぜだかユートは毎回頼む。

そして今、彼の目の前にはグズグズになったチャーハンが置かれた。僕の前には至って普通のリゾット。ユートは若干頬を引き攣らせながらも「いただきます」と一言呟いてから『イタリアリゾット風チャーハン』を食べ始めた。時々聞こえる「ふぐ……う、おえ」という音は終始聞こえないふりを通した。

そうして遅い夕食が終わり、僕らは食後のティータイムを楽しんでいた。ティータイムといっても、ドリンクバーのジュースなので厳密にはティータイムではないが。

謎のメニューを食べたせいで若干顔が青いユートがグラスを片手に僕に尋ねた。

「そっぴやお前、今日も学校あるだろ。寝なくて大丈夫なのか？」

「眠れないからね。睡眠薬がないと」

その質問に僕は自嘲の響きを込めながら返した。ユートは呆れたような目になって言う。

「中毒者みたいになってんな、お前」

その言葉は意識して出た言葉ではないだろうが、それでも少しだけほんの少しだけ僕の心を傷つけた。

ユートがコーラとメロンソーダとレモンスカッシュを混ぜて作った『ユートブレンド』という美味しそうには見えない飲み物を飲み下していく。

「それでお前、どうすんの？ 姫宮探すのか？」

「何で？」

怪訝気味に僕が聞き返す。

「何でつてお前、姫宮さんと仲良かっただろ。お前が壊れてた中学一年の時とか、俺は大丈夫か、つて言うくらいだったけど、姫宮さんは突き飛ばされようが何されようがずっとお前の傍にいただろ」「いたけど、何で？」

皆目見当がつかない。僕が姫宮を突き飛ばしたりしたのは本当で、彼女が僕の傍にずっといたのも本当だけど、それが何かしらの理由になるとは思えない。

「何でつて、お前……」

ユートが僕を呆れたような目で見ている。そんな目で見られても、僕も困る。

「助けてもらったら助けてあげなきゃいけないの？ 僕が頼んで助けてもらった訳でもないのに」

そして、本当の意味で助けてもらったわけでもないのに。黒くて冷たい感情が胸中でとぐるを巻く。

そんな僕を見てユートが冷めた口調で言った。

「人形君」

「？」

「お前の、中学校の時のあだ名」

僕はそんなあだ名で呼ばれていたのか。対して悲しくも無い。

緑の錠剤を口に含み、野菜ジュースで飲み込む。ちなみに、この薬は噛み砕くと効き始めるのが早くなるかわり、物凄く苦くて不味い木の根っこの様な味といえいいだろうか。

「どんな時も無気力で、決まった応対をして、笑えと言われたら笑えて、変わってねえなあ、お前」

呆れ顔を苦笑に変えてユートがそう言った。

「ユートは変わったね。何で高校行かなかったの、頭良かったじゃん。確か、偏差七十以上あったでしょ」

皮肉に皮肉で返すとユートが昔を懐かしむような目になり、

「おーおー、懐かしいね。まあ、それは聞かないでおいてくれや。

……そういや、バイト代の一割貰ってねえぞ」

話をはぐらかした。

僕が財布から今日のバイト代の一割、千円を渡そうとするとユートがそれを手で制してこう言った。

「お前助けてやれよ。姫宮さんの事。努力だけで一割のかわりにしてやるよ」

「……面倒」

「もうバイト紹介しねえ。短期で即日入れるバイトなんてそうそうないぞ」

「……何で僕が……」

「ああいう子つてのは、内に色々溜めちゃうもんなんだよ。何かサインなかったか、助けてくれーみたいなの？」

「窓ガラス三枚ぶち抜かれた」

「……変わったサインだな」

「嫌がらせの間違いでしょ。天使だか悪魔だか知らないけど、そんなの贈り物の度に窓ぶち抜かれてたんじゃ家計が苦しくて苦しくて」

「ちよい待ち、今なんて？」

ユートが口を付けていたグラスをテーブルに置きながら言った。

「嫌がらせの間違いでしょ」

「そこじゃなくて、天使らへんから」

「天使だか悪魔だか知らないけど、そんなのの贈り物の度に窓をぶち抜かれて」

「贈り物って事は、何かきたのか？」

「きたよ。紙をガムテープでグルグルまいた奴。手紙かなんか入ってそうなの。そんなのだけで窓ガラスを抜ける筈がないから、何か工夫してあるんだろうけど」

ユートは僕の言葉を聞き、ゆっくり咀嚼して飲み込んだ。そして理解が追いつくと同時に「すうう」と息を吸い込んで、

「馬ッ鹿野郎　！」

叫んだ。ファミレス内の数少ないお客さんが全員こちらを見るほどの声量。それを間近で喰らった僕は耳鳴りがしたほどだ。

なんなんだよ、いったい。

訝しさに苛立ちを込めた目で僕がユートを見つめる。

「それがサインだつつの！」

「……そんな漫画みたいな」

もしくはドラマみたいな。

「他に連絡手段がなかったんじゃねえの？」

「いつでも家にいたよ、僕」

「昼間会えない事情があつて、夜話したくても睡眠薬でぐっすり寝てるだろ、お前」

「否定はしない」

「普段何時に寝てる？」

「九時前」

「爺かよ、早過ぎるだろ！」

かぁー、と頭を掻き毟るユート。綺麗好きの彼はキチンと風呂に入っているらしい。頭皮の状態はバツチリだ。

「とりあえずお前、帰ってその届け物見る。んで、助けて欲しい的な事書いてあつたら助けてやれ」

ユートが僕をビシツと指指した。体を横に傾けても指は僕の頭を指したままだ。諦めて体勢を戻し嘆息の後に、それでも僕は「嫌だよ面倒臭い」と返した。

「もうバイト紹介しねーぞ」

先ほどよりも真剣味を増した声でユートが脅しをかけてくる。

「自分で探すよ」

それにも僕が屈しないのを見てユートも諦めたらしい。攻め口を変えたユートが最後の一言を僕に話す。

「精神科の先生も薬じゃ治らないとか言ってるんじゃない、お前の無気力症候群&情緒不安定」

薬よりも、人間関係において何かしらの進展があった方が薬より効くのではないかと私は思っている。

余計なお世話だ。ユートも新城医師も。

ポケットから錠剤ケースを取り出し、精神高揚剤ではなく、鎮静効果のある錠剤を一錠飲み込む。飲んだ後毎回やってしまったと思う。効き出す頃には怒りも何も収まっていてしまつて、無気力に拍車を掛けるだけなのに。

唐突に視界が眩み、頭が真っ白になった。耳の奥の方から、ぐわあぐわああん、と耳鳴りが響く。神経を直接こすつたような痛くて強烈な音。

耳を押さえて痛みにも似たその音が通り過ぎるのを待つ。

気付けば、ユートは目の前にはいなくて、ナプキンに赤いボールペんで「姫宮さんのことは俺も調べておいてやる。それと、明日もバイトあるからな。」と殴り書きが残してあつた。

伝票を持ってレジに行くと「お連れの方がお支払いしていただきました」と言われた。

余計なお節介なんだよ、全部全部。

## 心中

次の日も僕は学校が終わった後、螺子工場でバイトをしていた。ユートは卸売りの手伝いに行ってしまったので、今日は僕一人で流れてくる螺子を見ている。

今日はいやに歪な螺子の多い日だった。

同じ工場の、同じ機械で作って、同じ工程を経ているのに。

どうして歪になってしまうのだろうか。

だらつとした仕事の中でそんな疑問が心の中に沸々と湧き上がる。歪な螺子をライン工程からはじき出しながらも、そのことを考えてしまう。

もしかしたら、僕らもこの螺子のような物かもしれない。

同じ環境で生まれて、同じ教育を受けて、同じ歳をとって。

そしていつか、皆が個性を有す。

僕にはそれが歪みに見えて仕方がないけど、世間はそれを成長だと言っ。

そして、社会に対して害を為す大人を『成長の仕方を間違えた』とか『精神的にはまだ子供』って言い換える。

同じ環境で生まれて、同じ教育を受けて、同じ歳をとって。

同じ人間になる筈なんてないのに。

そもそも、同じ環境なんて有り得ないのに。世界レベルから見たら、同じように見えるかもしれないけど。それでも、人は人を、自分と同じ視点でみるべきではない。ほとんど同じでも、違うものは違うんだから。

午前二時でバイトは終わりだ。ブザーが鳴ると同時にベルトコンベアーがくぐもった音を発して動きを止めた。

更衣室で僕が作業着から私服へと着替えている途中でユートが現場から帰ってきた。そして僕の隣で着替え始める。

「それで、何か進展あったか？」

「……別に」

進展があつたも何も、気にしてすらいなかった。ただ、それをコートに感じ取られるのは癪で、わざとボカした言い方をした。その言い方にもコートは気にした素振りさえ見せず、あまつさえ僕を労うような言葉さえかけてきた。そして僕の意見を無視して勝手に話を始める。

「あんな、俺らの同級生でこの間指の骨を折られたやついたろ。ソイツが折られたつてのがまた傑作でな。折られてなかつたんだつてよ」

どういう事だろう。そう思いコートを見る。

「姫宮その時ボロボロの服を着ていたらしくてな。それを心配するフリをしてラブホに連れ込もうとして、抵抗されて、指脱臼したんだつてよ。それで脱臼した話を友達に愚痴つてたら姫宮さんのことを思い出して、何の気無しに話したら尾ひれが付いたと」

どうやら姫宮が失踪したという話は本当だったらしい。疑っていたわけではなかったが、今の話を聞いて現実味が急に増してきた。

着替え終わった僕は手持ち無沙汰にコートを待ちながら口を開いた。「尾ひれをつけやすかつたんだろうね」

なにせ、前科がある。噂にもなりやすかつただろう。

錆びたロッカーをコートが閉め、コートに続いて更衣室を出る。そしてそのまま工場の外に出てコートのバイクに跨る。別にタクシーやバスで帰ってもいいのだが、この時間にバスは無く、タクシーを使うとバイトをしている意味がなくなってしまうので僕はコートに送り迎えをしてもらっていた。

僕の頭上には満天の星が煌めいていた。工業地区にあたるこの辺りは山にほど近く、都市部からそれなりに離れているので星が良く見えるのだ。

次の日。

僕とユートは二人で螺子を見ていた。工場長に頼み込んだ結果、僕らはボロのパイプ椅子を借りることが出来た。おかげで今日は座っていられる。

「それで、何か進展したか？」

作業着に着替えている時から機会を伺っているには気付いていたけど、まさかベルトコンベアーが動いた瞬間に聞いてくるとは思わなかった。完全に意表をつかれた形の僕はそれでも普通に「別にと返した。」

「俺は進展あつたぜ」

チラリとユートを見ると、不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。いや、見下しているのかもしれない。無性に腹が立つ。

「進展あつたけど、確定じゃねえからまだ話せないけどな」

手元にあつた歪な形の螺子をユートに向かって投げつける。螺子はユートに当たることなく落ちて、カランと乾いた音を上げた。

それ以降は、肅々と、厳かに螺子を選別していく。

明日でバイトは一旦終わりだ。

そしてバイト最終日。

ベルトコンベアーの前で僕とユートは淡々と螺子を見守り続ける。

そもそも、会話が起き難いバイトなのだからコレが自然だ。

「この後、ちよつと付き合えよ」

最終日は十時までしかバイトがなく、バイトが終わった直後の更衣室でユートにそう言われた。僕としてはユートが送ってくれないと帰れないので素直に頷いておく。

ユートは行き先を告げなかったが、どうやら山へ向かっているらしい。帰り道とは逆方向へ真っ暗な道を進む。ライトが照らす道が揺れて見えた。

そうして連れてこられたのは、山の七合目に設置されている駐車場だった。二十台ばかりの車が止まれるだけのスペースに白線、それから自動販売機が一つとオレンジの光を落とす電燈が一つ、それだ

けがここにあるものの全てだった。

五月とはいえ夜の山は寒い。流石に息が白くなることはないものの、半そでの僕の背筋が震えるだけの寒さはあった。

「ほれ」

ユートが自動販売機で買ったコーラを渡してくる。

「……温かい」

「コーンポタージュ押したらそれが出た」

「温かいコーラなんて嫌だよ、ユートのと取り換えてよ」

奢ってもらった手前、生意気なことは言えないが、嫌なものは嫌だ。ユートは僕の言葉に薄く笑い、

「冷たいおしるこが飲みたいのか？ サイダー押したらコレが出たんだが、餅に至ってはガチガチだぞ」

と言った。それに対して僕は「ごめん」と一言返してから温かいコーラを飲みだした。恐ろしく甘い液体が口を蹂躞し喉を犯しながら胃に落ちていく。胸やけしそうだ。

そういえば、ユートが僕に対して嫌なことをしてきたことは一度もなかったな。

冷えたおしるこを食べているユートの横顔を見ながらそう思った。

「ガチるこ。ガチガチに凍った餅が入ったおしるこ、の略でどうだろっ」

「しらないよ」

ユートがチラチラとこちらの様子を伺いながら、ガチるこを飲んでいく。何か言いたいことがあるなら、言えばいいのに。

「姫宮さんさあ」

意を決したようにユートは話し始めた。

「全然普通だな、うん」

彼が知った姫宮のことを顧みて、そう納得して一人で頷くユート。ガチるこを食べ終わったユートは腕を組み、僕がコーラを飲み終わるのを待っているらしい。甘さというものは、温度が低いよりは高い方が断然甘いものである。そんなことを思っているうちに僕はコ

ーラを飲み終わり、空の缶を路上に置いた。それを待っていたユー  
トが間髪いれずに話し出す。

「中学二年生の時、首絞め事件があったろ。あれって何で起きたと  
思う?」

「……さあ?」

目撃はしたけど、理由なんて知っているわけがない。首を絞められ  
た相手は誰だっけ? 女生徒だったと気がするんだけど。

「三角関係は知ってるか? 姫宮さんと、サッカー部の渡里と、大  
空さんの」

「……ほう」

「初耳なわけだ。概要は省くけどさ、大空さんは渡里が好きで、渡  
里は姫宮さんが好きで、姫宮さんは何も知らずに大空さんに頼まれ  
て間を取り持ったわけだ。そしたら渡里がな、堂々と大空さんの告  
白突っぱねて、突っ張ったまんま姫宮さんに告白したわけだ。フリ  
ーズした姫宮さんに渡里は『返事は後でいい』とか言っただけだ」

渡里は確か、サッカー部のエースで部長だった筈だ。さわやかな笑  
い顔と『狂ってるんじゃないやねえの、アイツ』という言葉が思い出され  
た。

僕が路上に置いた缶をユートが拾って、自動販売機の横に併設され  
ているゴミ箱まで歩いて行って捨てた。

「次の日なんだけどさ、姫宮さん断ったらしいのな。『好きな人が  
いる』って。それでまあ、この話は終わりかな、と皆が思ったわ  
けなんだけどさ」

続きがあつてさ、と言いながらユートがこちらに戻ってくる。そし  
て僕の隣、バイクに横向きに腰かけるとまた話し出す。

「俺も昨日知ったんだけど、その日を境にして姫宮さんに対して虐  
めが始まったらしくて。女子特有の集団攻撃ではなかったらしいん  
だけど、かなりキツイものだったらしくてな。水泳の時間が終わる  
と服がなくて、返ってこなかったりとか。下駄箱の中にゴミブリを

入れられたりとか。母親の悪口を言われたりとか」

水泳の時間が終わった後に服がなかったら辛すぎるだろう。そのまま水着で授業を受けるわけにもいかなければ、ジャージを着て授業を受けても下着がないし。男子でも辛い内容を思春期の女子が受けたのだ。ゴキブリも古典的ではあるが、効果はかなりある。

「大体わかるけど、母親の悪口はこの場合いらなくない？ 他のに比べれば大したことじゃないでしょ」

それに対してユートは何かを言いかけて、押し黙り、暫く悩んでから声を絞り出した。

「キリスト教ってわかるか？」

「宗教だね」

漠然としたイメージが僕の頭の中で踊る。十字架、イエス、ユダ、マリア、一神教？

「詳しいことはわからないんだけどよ、姫宮さんのお母さん、キリスト教の中でもかなりストイックな所の人だったらしくてな。腿に棘付きのベルトを巻いていたとかなんとか。それで、その母親のことを大空さんが大声で馬鹿にしたというか、なんというか。『イカれてる』みたいなことを言いふらしたわけだ。結果として、それが保護者に伝わって姫宮さんの母親はバツシングを受けたらしくって」「それで」僕が続きを促す。「それでどうなったの？」

「姫宮さんは結構どころじゃないくらい気にしたらしくって、それを言いふらしてる大空さんを見て、虐めとかも大空さんがやってるって気付いたらしい」

あくまでココは予想だけだな、とユートが付け足した。だけど僕は予想とか、そんなのよりもっとずっと大事なことを思い出してそれをユートに問い掛けた。

「……その話オカシクない？ だって大空さんって確か」

「姫宮さんの親友だな」

正しくは、だった。

中学二年生のある場面まで、彼女たちはいつでも一緒にいて、凄く

仲良さげに笑い合っていた筈だ。壊れる前の姫宮を思い出すとそこには必ず大空さんがいた。

ああ。

ここまでできてようやく、物分かりの悪い僕にも合点がいった。

だから、大空さんは首を絞められたのか。

二週間も痣が残る程、本気で。

姫宮がどうして、笑い泣きで、首を絞めていたのか。

それら全てが繋がった。

「わかったみたいだな。どうしてあの二人が仲違いして、しっぱなしなのか」

そう言つてユートは空を見上げる。

「それじゃ、異常だったのは姫宮じゃなくて大空さんの方だったのかな」

「……どうだろうな。ただ、俺はあそこまでヤラレたらきつと、姫宮さん以上のことをしたと思うぜ」

空を見上げたまんまのユートは一つ息を吐いた。

都市部よりも、工場よりも、空に近くて星が輝く場所で、星を見る。この行為しにどれだけの意味があったかはわからないけど、ユートはそれで一応ふんぎりがついたらしい。見た目に反してユートは情に厚いから、人が知られたくないこと。今回で言うなら、姫宮の母の事、それから大空さんのことでも、もしかしたら落ち込んだのかもしれなかった。

どちらが促したわけでもないけど、僕らはバイクに跨った。150ccの小さな馬に跨って、ユートはキーを入れエンジンを掛けた。帰り道、行きよりも速度を増したバイクの上で僕は風に負けないように叫んだ。

「なんでココまで連れてきたの！」

「お前！ 逃げるじゃん、こういうことから！ だから逃げられねえとここまで連れて来たの！」

失敬な。僕はそこまで臆病者じゃない。

「助けてやれよ！ 良い子じゃねえか！」

「……そんなこと、知ってるよ」

ボソボソとした声で言った。この言葉はきつと風に負けて流されてしまっただろう。

「あ？ なんだった！」

ユートには聞こえなかったらしい。

だけど、それでいい。誰も知らなくていいんだ、あの頃の僕の気持ちなんて。

心中（後書き）

サブタイトルのセンスの無さに、今更絶望w

## 手紙

5

ユートに家まで送ってもらってから数時間。僕はひたすらユートに言われた言葉を反芻していた。

『助けてやれよ！ 良い子じゃねえか！』

知ってるよ、そんなこと。伊達に十五年以上近くに住んでいたわけではない。

だけど、それでも、僕は姫宮の為に何かをすることが怖いんだ。

「助ける……って簡単に言うけどさ」

そんなに簡単なことじゃない。助けるっていうのは、そんなに簡単なことじゃない。ましてや助けられるなんてどれ程難しいか。

「消しゴム取って、とか。掃除手伝って、とか」

そんな簡単なノリで人生に関わることに関わっちゃいけない。誰にだって矜持プライドはあるし、見せられない秘密だってある。そこに『助けてあげる』なんて免罪符を抱えて踏み込んだりいけないんだ。もし、本当に踏み込むならその人の罪や痛みに一生付き合う覚悟を持たなければいけない。僕はそう思う。

だから、僕の手が無意識のうちに動いて登録番号から勝手に電話を掛けた時は本当に驚いた。

「あ……」

そんな声が漏れて、ベッドの上で一人嘆息した。呼び出し画面に表示されているのは、『僕』と『人』で『ユート』と読ませる、漢字の読みを完全に無視した名前を持つ男。そして電話が繋がると共に僕は喋りだす。

「もしもしユート、今すぐ来れる？」

そんな電話を受けたユートは、それでも二つ返事を僕に返しスグに電話を切った。耳にどこか物悲しい機械音が響き、通話を切ると、待ち受けの時刻表示で時間を確認する。

『午前一時 三七分 六秒』

どうやら僕はユートと別れてから二時間余り、一人で悶々と考え込んでいたらしい。そのことに苦笑いを浮かべ、僕はユートを迎えるために階下に降りた。

ユートはそれから十分程で来た。深夜の住宅街に気を使った控えめの排気音が聴こえ、僕が外に出迎えに出るとユートは僕の家玄関横にバイクを止めているところだった。バイクを止め終わったユートを尻目に、僕は家に入る。後にユートも続いて入り鍵を掛けた。そして何も話さないままに二階の僕の部屋に入り、僕はまた何も言わずに部屋を出た。姫宮曰く『悪魔と天使』の手紙を探すためである。

記憶に反せず手紙は妹の部屋に無造作に二つ転がっていた。僕はそれを拾うと自室に戻り、壁際に捨てられていた手紙を加えた三つをユートの目前に置いた。

「まさか、まだ開けてすらいなかったのか？」

恐る恐ると言った風に聞くユートに僕はコクリと頷いた。

「……まあ、お前だからな。少しでもやるきになった分だけ進展か。その言葉を皮切りに僕は古代表記の悪魔が書かれた玉を開けていく。ベリベリとガムテープを剥がしていくと、中からクシャクシャに丸められた手紙が見つかった。取り出した手紙をユートと隣りあって見る。」

手紙には、短い独白が綴られていた。

『あの人は良い人。母さん（ママ）私を置いていった、父さん（パパ）私を遺していった。ママとパパ、信じているモノ違った。だから別れた。あの人はとても良い人。だけど私の傍にはどちらももういない。』

「次いくよ」

悪魔の現代表記の手紙を開ける。

『あの女は嫌い。私を叩いて蹴って刃物で刺す。あの女の連れてきた子も嫌い。どうして私が世話をしなければならぬの。でも、私はあの女がいなければ生きていけない。自分でお金を稼いで、部屋を借りて生きていく。そんな事、高校も卒業していない私には出来ない。お金は稼げても、部屋が借りられない。此処から逃げたい。彼方へと走り出したい。でも、自分がどうなるかが見えるから逃げられない。あの女が私に唯一残っていた思い出を壊していく。壊して壊して、壊し尽くされた。』

そして、最後の天使の手紙。

『賛美歌は綺麗。高音が頭を揺らすの。私には神様の声が聞こえた。土は土に、灰は灰に、人は人に』聖書の一節を私に指し示してくれたの。だから神様、ありがとう。私は、あるべきものをあるべき形に戻します。』

最初の悪魔は柔らかい筆跡で、次の悪魔の手紙は乱れた字で、最後の天使はどこか角ばった字で。それぞれに愛情を、憎しみを、狂気を込めて書かれていた。

この独白はきつと、僕に何かを伝えたかったのだろう。

だけど、僕には何も伝わらなかった。

彼女の為に何かしようと思って動いたけど。

それでも、ココまでできてなお、心が揺れることは無かった。

窓ガラスを割られたことが、今になって重く僕に押し掛かる。

「この手紙ってどういう順番で送られてきたんだ？」

「随分と洒落っ気のある郵送方法だね、窓ガラスをぶち抜くなんて。最初に天使、次に悪魔、最後に古代語表記の悪魔」

思わず毒を吐きながらも説明はキチンとした。

「これ、何で悪魔が二つあるんだ？」

「……さあ？」

「古い綴りの悪魔はどういうスペルなんだ？」

「Daemon」

ユートに手元の紙を見せる。

「デーモンじゃないな、それ。ダイヤモンドだ。多分」

「ダイヤモンドって何？」

「ギリシャ神話で守り神だ。それが度重なる宗教上の衝突で多宗教と混ざった結果、キリスト教では悪魔になったと言われている。そう考えると、この手紙に書いてある人物は、守り神が<sup>ダイヤモンド</sup>本当の両親。

悪魔が義母。天使が……自分か？」

今更になって思うが、どうして僕は高等教育を受けていないユートに物を習っているんだろう。学歴的には僕が進んでいるのに、何故だかちつとも勝てる気がしない。そのことが少しだけ悔しくて、わざと素っ気無く言葉を返す。

「かもね」

「かもねって……オブラートに包んであるけど、中々ヤバソウな事書いてあるだろ。手遅れになるぞ」

おいおい、と言った風にユートが僕を説き伏せようとする。

「手紙が最初に送られてきたのは先週の日曜日、月、火と続いて、今が金曜日。どうにかなるならとっくになってるよ」

ユートは正しいのかもれない。だけど僕には、正しいことよりも前にこの問題からの逃げ道が見えてしまっていた。流されやすい僕はただ漫然と、その逃げ道に身を任せるだけだ。

「むう。どう考えても助けて欲しいか、止めて欲しいように思うんだが。だって、本当に何かヤルなら犯行予告なんて邪魔なだけだろ？」

助けて欲しいか。

助けて欲しかったな、僕も。



## 手紙（後書き）

ここまで読んで頂いている方、有難うございます！

そろそろ話が動き出しますので、言える身分じゃないけれども、こ  
うご期待w

## 惑い

6

次の日。

この間目が眩んだ事が気になって僕は新城医師を尋ねていた。

「心理的なモノだと思っよ」

新城医師はそう言った。番茶を啜りながら話を続けていく。

「君は無気力で情緒不安定という、さもすれば真逆の状態を内に飼っているわけだ。相反するそれらが邪魔をして君は感情というものが時たまわからなくなっているようだが、その状態の時に、発散することも出来ずにイライラ。ストレスを貯め過ぎたんだろう。だから目が眩んだのは、脳が君を守るためにとった防衛措置の一つではないかな」

新城医師が茶碗をテーブルに置いた。

新城医師の話聞きながら思ったが、新城医師はよくよく見るとブルドッグに似ていた。決して不細工ではないのだが、何だろう。妙な安らぎを覚える顔だった。

「あ」

その顔に安らぎを覚えていると、しまりの悪い口から一音、外に飛び出した。

「あ？」

僕の口から漏れた音に敏感に反応する新城医師。

「友達の話なんですけど」

今更何でもないです、と言えない不思議な空気が辺りに立ち込めていた。マズイと思いつつも僕の口は語りだしてしまう。

「君が友達の話？ 珍しいね」

「話してもいいですか？」

「どうぞ」

僕は、姫宮が僕の家の窓ガラスをぶち抜いて手紙を郵送してきたこ

と、手紙の内容の事、それからユートとの会話や昔何があったかまで全てを新城医師に話した。

「……大分、凄い状況になっているね」

「はあ。まあ大分」

「しかし本当に、君が苛立ったように話すなんて珍しいね」

苛立って、話していたのだろうか。僕は。

ワカラナイ 自分の事なのに判らない。

「僕は、どうするべきなのでしょうか？」

自然とその問いが口から出た。

「私にはどう答える事も出来ないよ。何故なら、私が言った言葉で現状が動いたとして、それは君の為にも、友達の為にも、私の為にもならないからだ。しかし、君がそんな疑問を私にぶつけてくれた事は嬉しく思うよ。なんせ、四年間で始めての事だからね。四年掛かって患者一人治せないのでは、ただでさえ肩身の狭い精神医の肩身がさらに狭くなってしまふところだったからね」

新城医師が引き出しからお菓子を出して僕に勧めた。新城医師の私物であるらしいそれは、細長く切られた羊羹だった。

「私は何故だか羊羹を細長く切らないと落ち着かない性質でね」

はあ。と曖昧に頷きながら羊羹を一切れ、口に入れた。

甘い。

それしか思い浮かばなかった。

「君のしたいようにすればいいさ。多少、犯罪臭はするものの、確定ではない。君もそろそろ過去に決着をつけてもいい頃ではないかな。確か五月の第三週が四回忌だろうか？」

今日は五月の第二週の土曜日だ。今日は学校公開で本来休みの日に授業をしたから、振り替え休日は第四週の月曜日。この辺りの高校はその日に休日を合わせていた筈だ。合わせてあっても、僕は遊びに行くほど仲の良い友達はいないけれど。

新城医師が茶碗にお茶を注ぎながら言う。辺りに香ばしい番茶の香りが立ち込めた。

羊羹をフォークで縦に刺して食べ、合間にお茶を飲んでから僕は言った。

「姫宮は中学二年生の時に変わったんです」

「それはさつきも言っていたね。簡単に、だったけど。三角関係だったかな」

「はい。ある男の子が好きな女の子がいて、ある女の子は姫宮の友達で、ある男の子は姫宮が好きだった。それだけの、少女漫画で大安売りされていそうな、ありふれたと言っては何ですが、そんな関係だったんです。結果は破局でしたけど、普通の人なら折り合いをつけて生きていけるじゃないですか。そのうち、なんとも感じなくなるじゃないですか。でも、姫宮は違ったみたいなんですよね」

「君に似ているね」

慈しみを含んだ憐れみの目だった。こう言った視線には慣れてしまっているが、それでも新城医師の視線は格別だ。いつでも、何度向けられても、心に響いてくる。思わず溢れそうになる涙を気合いで押しとどめ、新城医師の言葉を引き継ぎ話していく。

「そう、ですかね。それで彼女は何日間か学校を無断欠席して学校に来た時、髪を黒に染めて、黒のカラーコンタクトをはめて学校に来たんですよ。何があったか知りませんが、母親の面影を消したいようにも感じました。それで、いつも通りある子が気軽に名前を呼んだら、その子、首を絞められたんですよ」

「豹変」

「そうですね。正に、豹変です」

表と裏がひっくり返って変わるように、ガラリと変わる。まるで別物のように、変わり果てる。

唐突に新城医師が顔を上げ、今思い出したとばかりに僕に質問をしてきた。

「その女の子の名前、姫宮だったかな？」

「そうですね」

あまり聞かない苗字だ、と思いつながら頷く。視界の端に、ひび割れ

たタイトルが映った。

「もしかして、その子の両親離婚してる？ 離婚して、お父さんは再婚して、ついこの間亡くなったりしていない」

最初は疑問、最後は確信の響きを持った声だった。

「してまずけど……」

「そっか。そっかそっか……」

そう言っつて新城医師は頷いて、何処か遠い目をした彼に見送られて僕は部屋を出た。

## 彼女

7

病院からの帰り道、僕は落ち込んでいた。

どうして、長い付き合いとはいえ、赤の他人に自分の気持ちを話したのか、そして姫宮の過去を話してしまったのか。

延々とそれを考え、悶々と自責しているうちに、自宅に着いてしまった。

扉の前に誰かがいる。

キラリと光る白に近い金の髪、腰まで伸びた髪の間からこちらを見つめる瞳は翡翠色。顔は神の理不尽のように整い、伸びる手足は陶器の人形のようにスラリと長い。

姫宮？

何をしているんだ、こいつは？

失踪中じゃないのか？

様々な疑問を頭に浮かべた僕が、最初に口にした言葉は

「家、寄ってく？」

そんな言葉だった。

「……是非に」

その言葉に姫宮は、ひまわりのような笑顔で頷いた。

姫宮を伴い家に入り、リビングに入る。適当に椅子に腰掛けている姫宮の前にお菓子を置き、飲み物を取りにキッチンに行く。冷蔵庫の中には、牛乳と食材しか入っていなかった。仕方なく僕は野菜室から果物を何種類か取り出すと、ミキサーを出し、果物ジュースを作る事にした。

「手紙、読んだ？」

オレンジの皮を？き、丁寧に実を取り出していると姫宮がその声を掛けてきた。

「読んだよ」

続いて林檎の皮を？く。？いた後細かく切ったそれもミキサーの中へ。

「どう思っただの？」

「別に」

嘘偽りのない言葉だったが、姫宮が悲しそうに俯いたのがキッチンからも見えた。

何種類か果物を入れ、最後に牛乳と砂糖を入れてミキサーを回す。耳に残る音が鳴り、果物が粉々になったあたりでミキサーを止め、グラス製のビールジョッキにそれを注いだ。姫宮の前にビールジョッキを置いて、僕は対面の椅子に座った。食卓を挟んで向かい合う僕と姫宮。

「窓ガラス割ったのはごめんね」

「……言葉、普通に直したの？」

姫宮の謝罪には応えずに、こちらからの疑問を口にした。僕も姫宮も、飲み物はおろかお菓子にも手をつけない。

「アレは少しでも投げ込んだものに興味を持ってもらえるようにと思っただけのことだから」

「そう」

「それと、手紙は窓ガラスを割ってから投げ入れたの」

「へえ」

「この家は何も変わってないね。ずっと前に来て以来、なんにも」  
「そうでもないよ」

姫宮がグルリと部屋を見渡す。瞳に浮かんでいる色は嫉妬？

「だって、寸分違わず前と一緒にじゃない。家具の位置もお皿の仕舞い方も。割れた皿とかもあったんでしょ？ わざわざ同じ物を買ってきたの？」

「偶然だよ」

「……ねエ、どうしてそんなに冷たいの？」

姫宮の声が氷点下をわったように冷たく響く。

「別に」

意識しているわけではないが淡々とした声が出る。その声に姫宮はピクリと反応し、冷たさはそのままに荒れ狂った。

「無気力が病気なんて嘘でしょ？ 私の事が嫌いだから何も反応を返してくれないんでしょ？ そうなんでしょ？ なんとか言っつてよ！？」

「嫌いだつたら、そもそも家に入れてない」

この一言で荒ぶっていた姫宮が大人しくなった。僕が作ったフルーツジュースに口をつける。それを見て僕も自分のジヨッキに口をつけた。青い果物の味、それらが混ざって、人口の砂糖で整えられた味。どこか自然と違う、不自然な味。

ゴトリとグラスを置いて、僕は今までの全ての疑問を乗せて質問をする。

否、これは詰問だ。

「姫宮は何がしたいの？」

乾いた唇を舐める。ざらついた塩の味がした。

「姫宮……」

僕の言葉にピクンと頭を上げた姫宮が「灰香って呼んで欲しい。昔みたいに」と言った。どうやら僕の詰問はスルーされたらしい。仕方無しに、言われた通りに呼び変えてからもう一度同じ台詞を言う。

「……灰香は何がしたいの？」

「何がって何が？」

キョトンとした顔をする灰香を見ながら、僕はお菓子に手を伸ばした。灰香はそれを目で追っただけだ。灰香と呼んでも何も無いことに驚く。

この顔は嘘だ……。

そう思いながらも、思うだけでは何も変わらないからワードを増やしていく。

「窓ガラス割ったり、手紙を届けたり、僕の家に来たり」

「友達の家に来る事はオカシイこと？」

「オカシクはないよ」

「そっかそっか。えへへ……」

灰香がふにやりと笑った。それが気配として僕に伝わってくる。

「義母さんを殺そうと思うの」

唐突に、突然に、やんわりとしていた灰香の眼が真剣味を帯びた。

「……へえ」

クッキーを食べながら相槌を打つ。

声は平淡だったが、心境は変化していた。若干の驚きと、事態が動くということについての多量の緊張がグルグルと心中を巡る。

「止めないの？」

自分がやると言ったのに、止めて欲しいような口調で灰香が言う。

「それは灰香の自由だから」

「止めてくれないの？」

クッキーを食べていると、先ほどよりも切実な嘆願が僕に届いた。

「……人を殺すなんていけないよ。止めるー」

棒読みが過ぎたかもしれない……。灰香の目が険しくなっている。

「僕は灰香に人を殺してなんて欲しくないよ、絶対」

「そっかあ。えへへ」

今度の台詞には満足したのか笑み崩れる灰香。  
疲れる。

灰香と話すと、とにかく疲れる。

だけど、なんとなく心地よい疲れだった。

「明つてさ」灰香が僕の名前を呼び捨てにする。「家族の事振り切れてないでしょ？」

「……どういう意味？ 皮肉？」

口角を笑みの時より五ミリほど多く吊り上げながら問い返した。

「羨ましい」

「……羨ましい？」

その言葉にビクリと僕が反応する。それを目で見て確かめた灰香が言葉を紡いでゆく。その様子を見て僕の胸はざわつき、胃がムカムカとし、灰香に敵意が湧く。

「だって明は、家族がいなくても思い出があるでしょ。家があるでしょ、遺品があるでしょ、残されたモノがあるでしょ。」

「……………」  
灰香が椅子から立ち上がり、半歩程後ろに下がりながら言う。

「私にはもう、何にも無い。ううん、無くなっていくの。家は義母の物みたいな状態だし、記憶は曖昧になるし、遺品は捨てられたし」

「……………」  
灰香はコチラを見ている。僕も黙って見つめる。穏やかではない視線の交差。灰香は羨望の眼差しで、僕は敵対を露わにした眼差しで、互いに互いを見つめる。

「だから明は、私が欲しいもの全部持つてる」  
「持つてないよ」

その言葉は、たった一言だったけど。

岩から水が染みだすように

辛さの中から滲み出したような言葉だった。

『僕は』『本当に』『何にも』『持つていないんだ』

灰香と同じように、全てを失って。

手の届かない場所に全て逝ってしまったんだから。

遺品だってあるだけじゃないか。あつたからって何が変わるわけでもない。辛さをより身近に感じるだけだ。

「嘘」

灰香が言った『嘘』が胸に突き刺さる。僕の言葉をまったく信じていない言葉に、我を忘れて叫ぶ。

「嘘じゃねえ」

灰香を睨みつける。視線に力があるなら灰香を殺せる強さで射抜く。「何も、僕のこと何も知らないで、知った風な口聞いて、何がしてえんだよ！」

「だって、だってだって持つてるじゃない！」

僕の気迫に一瞬気圧された灰香が、あらん限りの気概を振り絞って僕と渡り合おうとする。

「持ってねえつつてんだろ!!」

僕は大きく手を回して、家を指す。その間も決して灰香から目を離さず睨み続ける。

「この家の名義は僕の叔父だ！ わかるか？ わかるよな！」

憤怒と呼べるほどのソレを必死に内に留めている間に、気付けば僕は立ち上がっており、その時の衝撃で倒れたグラスからフルーツジュースが流れていく。二人分のフルーツジュースがテーブルにぶちまけられ、テーブルの下へと滝のように流れ落ちていく。

「……え？」

灰香の思考が一瞬止まった。空気が凍りつく。その冷たさで脳内に溜まっていた熱が消え去った。だけど、今更止まらない。

「……僕が何で薬を飲まなきゃ寝られないかわかるか？ 悪夢を見るからだよ、必ず家族が死んでいく夢を見るんだ！」

僕は四年前からその夢しか見られない。

僕の中の時計はそこで止まってしまった。

父がいた、母がいた、妹がいた。僕が行かなかったドライブの最中に皆死んだ。雨で滑って、崖の下に落ちて死んだ。人としての造形を留めていない家族。頭の無い父、半身が潰れた母、目玉が飛び出した妹。病院の霊安室で見た家族の最後の姿。薬剤では隠し切れない腐乱臭が脳に焼付いた。肉があんなに腐りやすいと知ったのはこの時だった。

いつだって僕は、その時のことを忘れたことなんてない。

家族の部屋に入ると自然と吐き気が込み上げる。どうしても、最悪の時を思い出す。

楽しかった思い出は薄れるのに、他愛のない日々は消えるのに、最悪の瞬間だけは無くなってくれない。

だからこそその悪夢。

「父さんが死んで、父さんの兄と言う人が僕の所に来た。あの人は、アイツは！ 僕の面倒を見ると言って、その為に必要だと言って、僕にサインをさせた、両親の財産全てを後見人に預けるサインを、

無理矢理させたんだ！」

家族がいなくなつて放心状態だった僕は、初めて会つた優しい叔父に心を許した。下卑た笑みだと気付かぬままに書類にサインをした。全ての失敗の始まりだった。

「……でも、無理矢理なら法律で何とかなるんじゃないの？」

灰香の言葉を鼻で笑い飛ばす。荒ぶる感情が、堰を切つたように溢れ出す。

「ならない！ 誓約書があるんだよ、『満十八歳まで遺産を管理運用する』わかるかい？ 彼は運用が出来るんだよ。預かっているといい続ける限り、詐欺は詐欺にならない。だつてお金を返すんだから。それは詐欺じゃない。僕が十八になる頃には全部使い終わられた後だッ！」

「嘘！ だつて明、住んでるじゃない、この家にいるじゃない！」  
「毎月毎月家を出るように脅されてるよ、僕は！ 生活費だつて自分で稼いでる。学費は体面を気にしてアイツが払ってるけど、だから、僕は、僕は……！」

もう何が言いたいのか自分でもわからない。ただ自分の内から迸る何かに任せて叫ぶ。

「助けて欲しかったよ、僕だつて……！」

それは、言えなかった言葉。

二年かかつてようやく言えた、救いを求める言葉。

遅すぎた言葉。

遅すぎた想い。

それに鋭敏に反応した灰香が半狂乱になる。

「傍にいたじゃない、私、私っ」

「傍にいたから、遠ざけるしかなかったんじゃないか！ 巻き込むわけにはいかなかったんだ、姫宮まで、灰香まで巻き込むわけにはいかなかったんだ よ！」

足元がぐらついてたたらを踏んだ。靴下が冷たいと思つたら床はとつくにフルーツジュースまみれで、その真ん中に足を入れている僕

がよるめいた事で新たな波紋が広がっているところだった。

「何で！？ どうして！？ どうしてあの時私を頼ってくれないでいて、どうしてそれを今話すの！？」

「灰香の目があの頃の僕にそっくりだから、一人で全て片付ける気なんだから？ でも、心の何処かで踏ん切りがつかなくて、力が足りないかとも怖くて、でも今を何とかしたいと思ってる目だ」だから「僕に止めて欲しかったのはそういうわけなんだから？」

一瞬目を見開いた灰香が

「止めて欲しいわよ、助けて欲しいわよ」

灰香が叫ぶ。だってだってと咽びながら叫ぶ。ありったけの力で、吼える。

「だって辛いじゃない、辛いじゃない、殴られて蹴られて刺されて連れ子の世話の為に学校に行けなくて、こんな事の為に生まれたわけじゃないって思うじゃない！」

「だからわからないんだよ、灰香が僕に何をしたいのかわからない！ だって、僕には君を救う力はないんだよ。君を止めたら君は嫌な世界から抜けられないままでしょ、じゃあ僕にどうしろってのさ！？」

「私にもわからないわよ！」

そう言つて、喉を押さえて何度かこほこほと咳き込んだ灰香は、椅子にへたり込んだ。唇を噛み締め目に涙を溜め、それでも泣かない。意地だけで涙を抑えるその姿は 哀れだった。

ポケットから錠剤ケースを出し、ケースから青色の鎮静効果がある錠剤を一錠取り出し灰香の前に置いた。

「飲めば、落ち着くよ」

そう言つてそつと部屋を出た。部屋を出てすぐに僕はずると座り込んだ。

何をしているんだ、僕は。

今まで隠してきたのに、全部話しちゃって。

何がしたいんだ、僕は。

本当はわかっている。灰香の事は助けたい。

でも、関わる勇気がないのだ。

どうしても彼女の人生に関わる勇気が出てこない。

あと一歩で飛び出せるのに。そうしたら、彼女の為に死に物狂いになれるのに。

進行と後退の合図が頭に鳴り響き続けている。警笛に似た合図と灰香の微かな嗚咽が僕の家染みていつて、なんとも言えず切なくなつた。こんな気持ちだけは正確にわかつてしまう。

錠剤ケースの中身を、全て口に入れる。そのままゴリゴリと噛み砕いて飲み込む。精神高揚剤も、安定剤も、睡眠薬も、どうでもいい。今のグチャグチャな気持ちを忘れさせてくれるなら。

多量の薬のせめぎ合いにやがて睡眠薬が勝ち、その凶悪な睡魔によって僕は昏倒するように眠りに落ちた。それが逃げたとわかつていても、臆病な僕は微睡む。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6817x/>

---

ハシバミの樹

2011年10月19日09時23分発行